

# 第4章 県内の取組

## 1 三重県と全国を取組の比較

学校質問紙の回答と平均正答率との間に、全国では関連が見られる（「よく行った」と「全くやっていない」の回答における平均正答率の差が5ポイント以上）が、本県ではあまり見られない項目を取り上げました。

これらは全国の結果からわかるように、学力の向上に有効な取組となっています。その取組を進める意義を再確認するとともに、各学校において行われている取組内容・方法を見直し、改善を図っていく必要があります。

### 小学校

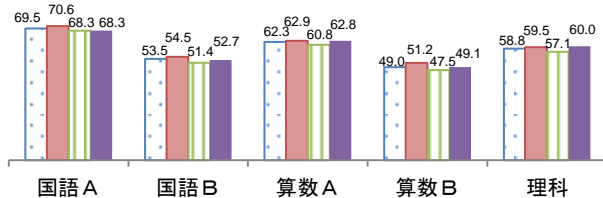
- 基礎・基本の学習における理解・定着とともに、学習した内容を活用した発展問題を効果的に取り入れていくことが大切です。
- 理科では、既習の内容や生活経験を基にしながら仮説を立て、仮説を確かめるために、自ら発想した解決方法で観察、実験を行うことで、児童自らの主体的な問題解決の活動となります。
- 家庭学習の取組では、ノートの使い方やまとめ方など児童にどのような学習の仕方をするかを具体的に示すことが有効です。

■ よく行った     
 ■ どちらかといえば、行った     
 ■ あまり行っていない     
 ■ 全く行っていない

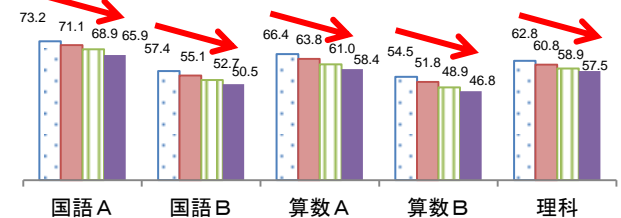
※ ↘ は、学校質問紙と平均正答率との間に関連が見られ、平均正答率の差が5ポイント以上のものを示しています。

【学校質問紙】(38) 調査対象学年の児童に対する算数の指導として、前年度までに発展的な学習の指導を行いましたか

【三重県】

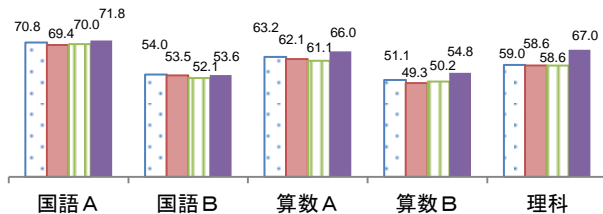


【全国】

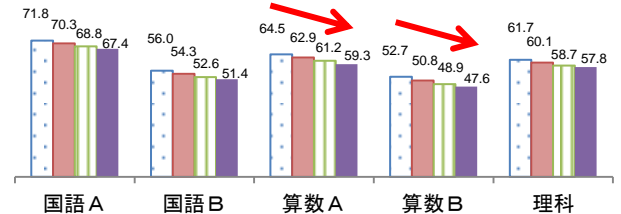


【学校質問紙】(47) 調査対象学年の児童に対する理科の指導として、前年度までに、自ら考えた仮説をもとに観察、実験の計画を立てさせる指導を行いましたか

【三重県】

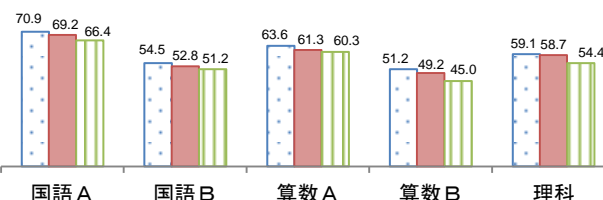


【全国】

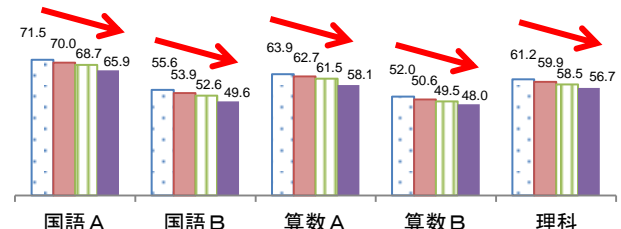


【学校質問紙】(66) 調査対象学年の児童に対して、前年度までに、家庭学習の取組として、児童に家庭での学習方法等を具体例を挙げながら教えるようにしましたか（国語／算数共通）

【三重県】



【全国】



中学校

- 観察や実験の結果を分析して解釈することは、予想や仮説と比較したり、今までに習得した知識・技能と関連付けて考えたりすることになります。理科に限らず他の教科においても探究する学習活動を進めていくことは重要です。
- 学級全員で様々な活動に取り組むことは、目標に向かって見通しを持った活動を対話しながら進めることとなり、「主体的・対話的で深い学び」につながります。課題やテーマを学校教育全体を通して設定し、協働的な経験を積ませる中で、達成感を味わわせることが大切です。
- 家庭学習は、提出後の評価・指導を行うことで、学習内容の理解・定着や生徒の主体的な学習につながります。

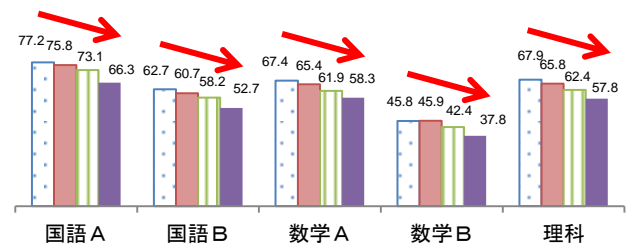
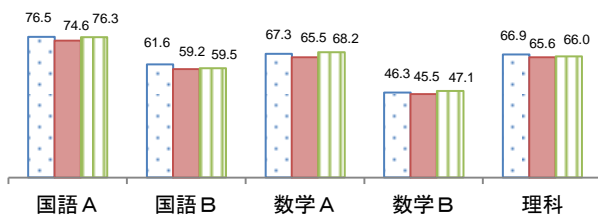
よく行った      どちらかといえば、行った      あまり行っていない      全く行っていない

※ ↘ は、学校質問紙と平均正答率との間に関連が見られ、平均正答率の差が5ポイント以上のものを示しています。

【学校質問紙】(46) 調査対象学年の生徒に対する理科の指導に関して、前年度までに、観察や実験の結果を分析し解釈する指導を行いましたか

【三重県】

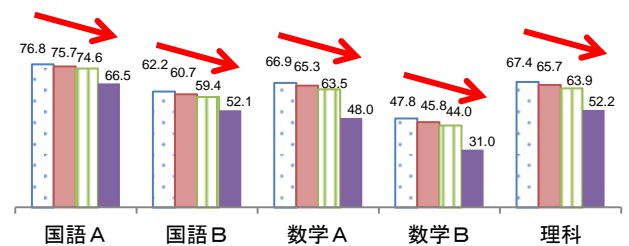
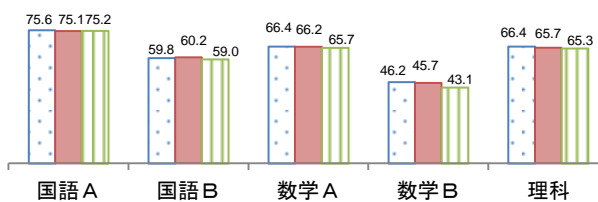
【全国】



【学校質問紙】(23) 調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、学級全員で取り組んだり挑戦したりする課題やテーマを与えましたか

【三重県】

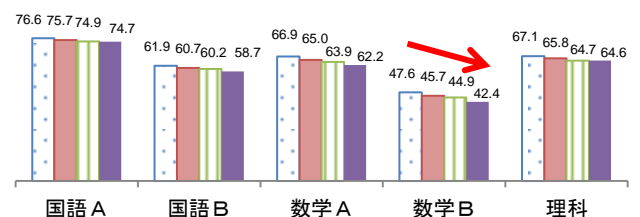
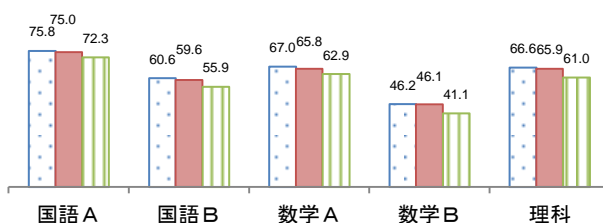
【全国】



【学校質問紙】(65) 調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、数学の指導として、生徒に与えた家庭学習の課題（長期休業期間中の課題を除く）について、評価・指導しましたか

【三重県】

【全国】



●コミュニティ・スクールの設置校の全国の平均正答率との差

	小学校					中学校				
	国語A	国語B	算数A	算数B	理科	国語A	国語B	数学A	数学B	理科
H27 ↓ H28	×	×	○	◎	×	×	△	◎	◎	○
H28 ↓ H29	◎	×	△	×		◎	◎	◎	◎	
H29 ↓ H30	◎	×	◎	◎		×	×	◎	×	
H21 ↓ H30	○	◎	○	○		◎	◎	◎	△	

※理科は、H27 と H30 を比較した結果を示します。

- ・設置校の平均正答率は、平成 21 と比較し、8教科中7教科で全国との差が改善されています。H29 との比較では、小学校の設置校は、国語A、算数A、算数Bで全国との差が改善され、かつ非設置校より改善の幅が大きくなっています。中学校では、数学A、理科で全国との差が改善されています（理科は平成27年度との比較）。

●学校支援地域本部の実施校（学校支援地域本部設置校のうち学習支援を35日（週1回程度）以上実施している学校）の全国の平均正答率との差

	小学校					中学校				
	国語A	国語B	算数A	算数B	理科	国語A	国語B	数学A	数学B	理科
H27 ↓ H28	◎	◎	◎	◎	○	×	×	◎	◎	◎
H28 ↓ H29	×	×	×	×		○	×	×	×	
H29 ↓ H30	◎	×	×	△		◎	◎	◎	△	
H21 ↓ H30	◎	◎	◎	◎		○	×	◎	×	

※理科は、H27 と H30 を比較した結果を示します。

- ・実施校の平均正答率は、平成21年度と比較すると、8教科中6教科で改善が見られ、うち5教科で未実施校より改善の幅が大きくなっています。平成29年度との比較では、小学校では国語A、理科で全国との差が改善され、国語Aでは未実施校より改善の幅が大きくなっています（理科は平成27年度との比較）。中学校では国語A、国語B、数学A、理科で全国との差が改善され、かつ未実施校より改善の幅が大きくなっています（理科は平成27年度との比較）。

\* H21年度：「みえの学力向上県民運動」開始（H24年度）以前の直近の悉皆調査の年度

- ◎…全国と設置校（実施校）との差が改善されており、非設置校（非実施校）よりも改善幅が大きい。
- …全国と設置校（実施校）との差が改善されているが、非設置校（非実施校）よりは改善幅が小さい。
- △…全国と設置校（実施校）との差が改善されていないが、非設置校（非実施校）よりは改善幅が大きい。
- ×

## わからないことから出発し、一人ひとりの「わかった」「できた」に

## 四日市市立保々小学校

「自分で解く力を、どの子にも身に付けてほしい」という願いから、図示する指導、習熟度別指導、補充学習の取組をじっくりと積み重ねてきました。全国学調やみえスタディ・チェックなどの分析から見えてきた子どもたちのつまずきを全教員で共有することで、各学年のおさえないポイントが明らかになり、課題づくり研修や一人ひとりにあわせた補充学習の取組に生かしています。そして授業では、考えを描いた図や対話をとおして、一人ひとりの理解や定着の状況を確認めながら取組を進めています。

**取組 ① 全学年で図示する活動に取り組み、量感イメージを捉える**

四日市モデルの5つのプロセス（四日市市教育委員会「問題解決能力向上のための授業づくりガイドブック」）の視点を大切にしながら、子どもたちが問題の内容を整理したり、考えの見通しを持つたりするために、全学年において授業の中で図示する活動を大切にしています。

具体から半具体、そして抽象へのつながりを意識し、発達段階に応じて、テープ図や線分図、数直線図に表し、量感イメージをはっきりさせて、自分の考えを明確にしたり、伝えたりする活動につなげています。図示の形式を指導するとともに、「図のどれが何に当たるのか」「どのくらいの量に当たるのか」などの意味をていねいに確認しながら指導しています。

式・答えと問題文・図とを照らし合わせたとき、子どもたちが自分で間違いに気付けるよう、わからないことを中心に据えて、子ども同士や教員との対話を積極的に取り入れようとしています。ときには、教員が問題や図について問いかけ、自分でもう一度、図と式・答えを見直すきっかけをつくっています。

## ○テープ図について（学校の共通理解事項）

- ・ 2つの数量の割合（比）を意識して数量間の線を入れる位置を考えさせる。
- ・ 全体と2つの数量それぞれを上（全体）と下（2つの数量）に分けてかかせる。
- ・ テープ図の中に数をかきこむのではなく、どこからどこまでを示しているかがわかるように図の外に数をかかせる。

## 【基本の型】

**取組 ② 子どもたちが見通しを持ってコースを選択する習熟度別指導**

算数の習熟度別指導では、問題をどのような方法で考えていくかによって、子どもたち自身がコースを選択しています。自分に自信が持てないと、基礎基本コースを選びがちな子どもたちの実態から、単元の始めはTTによる一斉学習の形態で行い、その単元の見通しを持たせます。単元の間中以降の学習において、学習内容の理解状況を確認するテスト等を行いながら、子どもたちが自分のつまずきを知り、子どもたちに自力で考えられるかどうかの見通しを持たせ、習熟度別指導のコース選択を行います。「じっくりコース」では、問題のわかっていることや求めることをていねいに確認しながら学習を進めます。「ぐんぐんコース」では、問題を自力で考えていき、互いの考えを出し合いながら学習を進めます。それぞれのコースで学ぶ過程を変えながら行き、自力で解けることをめざして学習しています。

**取組 ③ 「ステップアップ方式」で理解状況を確認する補充学習**

朝の時間帯を活用して補充学習に取り組み、算数を中心に「ステップアップ方式」で学習を進めています。学習で使用するプリントは、算数の各学年における基礎的・基本的な学習内容を分類して、作成しています。同ステップで5種類の問題があり、すべて正答になるまで、5種類の問題を繰り返し取り組ませています。作成したプリントは、放課後の補充学習等でも活用しています。

朝の学習では、担任以外の教員も確かめに関わり、一人ひとりの理解状況を確認め合うようにしています。また、次の時間に取り組ませるプリントを一人ひとりの進度にあわせて準備します。子どもたちはプリントを「朝学ファイル」にファイリングし、自分がどこまで進んだのか、自分の得意や苦手は何かを確かめられるようになっていきます。

**成果 子ども一人ひとりが理解・定着状況を確認めながら、着実に学習内容を身に付けています**

子どもたちが図示することで、自分の考えが正しいかどうか見直すことができ、テストやプリントの問題を見直して解くことで正答が多くなってきました。また「ステップアップ方式」のプリント学習を繰り返しながら、基礎的・基本的な問題でつまずいていた子どもが、問題を数多く解けるようになり、それが自信につながってきています。学校全体で、一つひとつの取組について共通理解を図り、組織的に取り組んできた成果が着実に結果として表れてきました。今後も、個を大切に、対話的な学びと自力で考える授業をとおして、子どもたちの「わかった」「できた」という自信を育み、学び合いのできる学級集団の力を高め、意欲的・主体的に学ぶ子の育成を図ることをめざして取組を進めていきます。

## 朝と昼の学習を活用した基礎基本の定着の徹底

津市立敬和小学校

「確かな学力の向上」については、子どもの「生きる力」を育むものであると捉えています。様々な知識や技能を身に付けるだけでなく、困難な課題に対して諦めずに自らの力で解決しようとしたり、解決方法を考えたりできる力を付けていく必要があります。そこで、将来の自分の夢に向かって努力していただけるような基礎学力を身に付けるための取組を進めています。

### ○朝の学習・昼の学習における継続した取組

内容・実施時間：【国語科】漢字 【算数科】計算

		月	火	水	木	金
朝の学習 (8:30～8:45)	1・2年生	読書(※1)				
	3～6年生	読書(※1)	漢字	読書(※1)	漢字	漢字
昼の学習 (13:35～13:50)	1・2年生	計算	漢字	計算	漢字	漢字
	3～6年生	計算	※2	計算	※2	※2

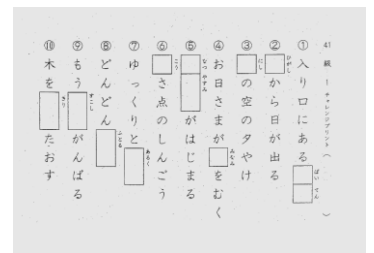
※1の時間帯は、読書を実施 ※2の時間帯は、国語または外国語活動の授業を実施

### 取組① 漢字プリントに取り組み、検定合格をめざす

#### ○漢字プリント・検定プリントを実施

漢字プリント	学習する学年	検定合格 目標学年	検定 合格点
50～47級	1年生(80字)	2年生	90点 以上
46～39級	2年生(160字)	3年生	
38～29級	3年生(200字)	4年生	
28～19級	4年生(200字)	5年生	
18～10級	5年生(185字)	6年生	
9～1級	6年生(181字)	中学生	
1段～	中学生		

※漢字プリント、検定プリントは、教科書をもとに学校で作成  
 ※各級の漢字プリントは、チャレンジプリント1～3(資料1)の3枚で構成  
 ※検定プリントは各級に1枚あり、チャレンジプリント1～3(30問)の中から20問を出題



(資料1) チャレンジプリント

#### 〈学習の流れ〉

- ①児童が各自で、自分の進度の漢字プリントを所定の棚から取り、取り組む。
- ②担任に提出する。(その場で担任が確かめをして、返却する。)
- ③プリントの裏のマス目に漢字練習をする。
- ④漢字練習をしたプリントを担任に確認してもらい、次のプリントに進む。
- ⑤取り組んだプリントをファイルに綴じる。

#### 〈検定について〉

- ①各級のチャレンジプリント1～3を終えた後、検定プリントに挑戦。
- ②担任に採点してもらい、90点以上(20問中18問正答)で合格。
- ③合格した級については、ファイルに綴じてある「漢字がんばり表」(資料2)の該当級の欄に日付を記入し、合格のシールを貼る。

#### ○継続した取組による漢字の力の定着

- ・各級ごとに検定を設けることで、児童にとって明確な目標が持てるとともに、検定合格により達成感を得ることができ、次の学習への意欲の向上につながっています。また、児童が自分のペースで、継続して6年間取り組むことで、漢字の力が着実に育まれています。



(資料2) 漢字がんばり表

### 取組② 学習中の単元の基礎となる計算プリントを各学年で実施

#### ○各学年での実施方法

- ①配付された計算プリントの問題を解く。
- ②答え合わせをする。(わからない問題→担任が助言する。児童間で聞き合う。)
- ③取り組んだ計算プリントをファイルに綴じる。

#### ○学習内容の積み上げによる計算する力の定着

- ・学習中の単元の基礎となる計算問題に取り組むことで、基礎学力の定着を図ると同時に、現在学習している単元の学習内容の確実な理解と定着につながっています。

**成 果** 毎日の継続した取組により、子どもたちが漢字・計算を確実に身に付けています

朝の学習・昼の学習は、児童が入学してから6年間、毎日15分ずつ取り組んでいます。全国学調の国語Aにおける漢字の問題で、全国の平均正答率との差が改善してきていることから、児童が自分のペースで継続的に取組を進めていることが、基礎基本の確実な定着につながっていると考えます。

## 学び合いを大切にする習熟度別少人数指導の実践

東員町立神田小学校

神田小学校では、「わからない」と自分から言える、安心して学べる学級集団を大切にし、『主体的・対話的で深い学び』のある授業の研究を算数科の少人数指導を通して進めています。1年生はティーム・ティーチング、2年生は均等割、3年生以上は習熟度別による少人数指導に取り組んでいます。

### 取組① わからないことを「わからない」と言える学級集団づくり

#### ○学び合う姿を価値づける

「わからないことを自分から聞く」「ノートを真ん中に置き、図や式を使って話す」など、子どもたちが学び合う姿を写真で残し価値付けています。教員だけで共有するのではなく、校内に掲示して学びのイメージを発信することで、子どもと共に授業づくりを進めています。



#### ○わからないことはペアで考える

わからないことはペアで考えることを徹底しています。「ここまではわかる」「ここからわからない」と言えること、「わからないから教えて」と聞かれたら相手にわかるまで責任を持って説明することを大切にしています。黒板を使って説明してもよいし、ペアでわからなければ他のペアに聞きに行ってもよいと指導しています。個人で考える時間でも、自然にペア学習、グループ学習に移行していく場面も見られます。全体共有の場面では、ペアで前に出て協力して説明します。

### 取組② 低学力層10%未満を実現する少人数指導

#### ○習熟度別コース編制

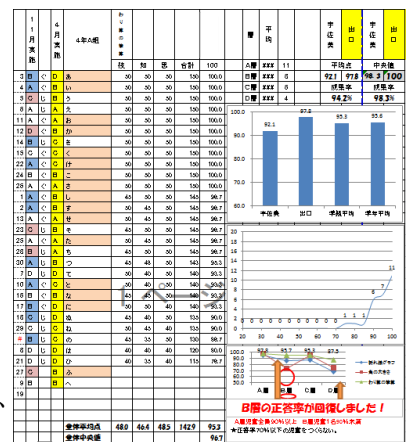
コース選択は、児童と保護者の希望をもとに、担任と少人数指導担当で調整をしています。コースは「じっくりコース」と「ぐんぐんコース」の2つで、学期の途中で変更することができます。どちらのコースでも、図や数直線図、言葉、数字を使って論理的に思考し表現できる力を付けることを指導の重点に置いています。これまでの取組から、基礎基本の習熟に時間をかける「じっくりコース」は、人数を10人程度にすることが効果的だということがわかってきました。

#### ○指導教諭と担任との連携

指導教諭は少人数指導のコーディネーターとなり単元構想を考えます。そして、単元ごとの指導事項を担当と話し合います。その結果、どちらのコースでも同じねらいで授業を進めることが可能になります。話し合いは必ず週1回、学年会の中に位置づけています。

#### ○単元テスト・学力調査の活用

指導教諭は単元テストや総合学力調査等の分析結果をデータ化し、単元構想や、担任との話し合いのエビデンスにします。授業者がコースごとや学級ごとの課題、一人ひとりの子どものつまづきを継続して把握することができ、どの学年のどの単元をより時間をかけて指導するのか等、系統立てた指導やきめ細かな指導につなげています。



### 取組③ 授業の中で定着・発展に取り組む時間を設定

#### ○定着・発展の時間

時間配分や指導内容を工夫し、単元の終わりに定着状況を確認したり、発展的な問題に挑戦する補充学習の時間を設定しています。学習内容の定着を図ってから単元テストに臨むことで、子どもたちの自信にもつながっています。

#### ○全国学調、みえスタディ・チェック、総合学力調査の再活用

年間指導計画に、全国学調、みえスタディ・チェック、総合学力調査の再活用を位置づけて取り組んでいます。

### 成果 習熟度別少人数指導により、子どもたちの学習内容の理解と定着が図れています

習熟度別少人数指導に取り組み始めてから、総合学力調査の結果による低学力層の子どもの割合が大きく減りました。また、子どもたちの学習内容の定着状況をデータで把握することで、取り組むべき課題が明確になり、教員の意識も変わってきました。今後も東員町16年一貫教育プランに則り、「勤勉性」につながる「自ら学び合う力」を育む授業づくりに向けて研修を進めていきます。

## 生徒の主体的な学びにつなげる習熟度別指導の実践

伊勢市立二見中学校

二見中学校の1年生、2年生では、数学科において習熟度別少人数指導に取り組んでいます。「基礎(α)」コースでは、基礎的・基本的な内容にじっくり取り組めるように、「標準・応用(β)」コースでは、お互いが学び合う授業をめざして自分の考えを自信を持って人に伝えられるように進めています。「標準・応用(β)」コースでは、少しずつ伝えられる様子が伺え、自信も高まってきています。「基礎(α)」コースでは、授業中に学習内容を「わかった」と理解したように生徒が思っている、時間が経つと「なんでここがこうなるの」「どうしたらいいの」と疑問の声が出るなど、わからないところをつきつめて確認するところまでいかず、定着につながっていない現状があります。

生徒には、今まで以上に数学に興味を持って、主体的に楽しく学んでほしいと、いろいろな「数」を使って「楽しむ」意味を込めて「数楽ラボ」と名付けた通信を発行しています。生徒が今まで以上に数学に興味を持てるよう、特に習熟度別指導、家庭学習における予習や復習、課題プリントの活用を力を入れて取り組んでいます。

### 取組① アンケートによる生徒の意識の把握と保護者へのきめ細かな説明によるコース選択

#### ○習熟度別コースの選択

基礎(α)コースと標準・応用(β)コースで生徒の人数の割合は1:2としています。コース選択については、生徒の希望を踏まえながらも、生徒の学習状況や特性、生徒同士の人間関係、コースにおけるリーダーづくりに留意し、コースの自己選択ができるよう面談で生徒を支援しながら決定します。また、数学部会や担任と授業の進度や生徒の様子を絶えず情報交換し、次時の指導につなげています。

#### ○保護者への「習熟度別指導」と「評価」の説明

保護者へは、習熟度別指導のねらいやコースの特徴、学習の進め方について4月当初の学年懇談会や文書で説明します。また「学習の進捗は同じであること」と「どちらのコースも共通に定期テスト・小テスト・学習態度・発表・提出物・コミュニケーション活動を総合して評価すること」を丁寧に伝えます。

#### <生徒の感想>

・一斉授業では意見を言ったり、わからないところを聞いたりすることができませんでしたが、コース別で学習することで気軽に人に聞いたり、話し合ったりできるなど、自分の意見が出しやすくなりました。  
 ・今まで数学が苦手でしたが、コース別になり自分にあった授業を受けることで少しずつテストの点数が上がって本当に嬉しいと思いました。  
 ・最初の頃は、標準・応用(β)コースでしたが、数学が得意な人が多く、私が計算問題をしているときに、他の人がすぐに答えを出してしまい、理解するところまでいかず、とても大変でしたが、基礎(α)コースに変更して、進むスピードもゆっくりで丁寧に教えてくれたので、ゆとりを持って授業に臨むことができてよかったです。

#### ○生徒のコース変更について

生徒のコース変更については、定期テスト・小テストの状況、アンケートや面談により、生徒の学習状況や学習意欲を把握したうえで、変更できるようにしています。面談では、生徒の自己認識に基づく適切なコース選択が行えるよう留意しています。

### 取組② コースに応じた家庭学習と学習内容を確認する宿題用課題プリントの実施

#### ○習熟度別コースに応じた家庭学習

基礎(α)コースでは、復習を重視した家庭学習を、標準・応用(β)コースでは、予習を重視した家庭学習を行っています。各コースの家庭学習の方法を「数楽ラボ」通信により、生徒、家庭に伝え、確実な学習内容の理解・定着につなげています。

#### 《これからの学習方法》

#### αコース

学校で学んだ後一歩必ず復習をして下さい。  
 復習の方法→(ノートに書いたことを違うノートに書き写す。学校でやった問題を解き直さないで自分の力でやってみる。)  
 宿題は、必ずやること。(わからなかったら授業が始まる前に友達に聞いてノートに書いておこう。)

#### βコース

必ず予習をしてください。授業で初めて聴くと言わないようにしておくこと。  
 授業では、復習をする感じで、先生が話していることは教科書のどこに書いてあるのか、よくわかるようにしておく。  
 教科書に書いてあることは、聞かれたらすぐ答えられるようにしておく。

βコースでは、予習がしていることを条件として、授業を進めていくようにします。演習の時間を多く取るようにしていきます。(ただし、これはみなさんの協力が必要です。) ワンランク上の問題に1つでも多く挑戦しましょう。



#### ○課題プリントの利用

1週間ごとに生徒自身が学習内容を確認する宿題用の課題プリントを教員が作成し、生徒に提供しています。生徒が自ら進んで「やってみよう」と意欲を持たせるように教員が働きかけながら添削しています。あわせて、教員が詳しい問題の解説を作成し、廊下に掲示しています。

### 成果 学習に取り組む意欲や自信を持って取り組む姿勢が育まれています

習熟度別少人数指導の導入により、大勢の中で自分の意見を言えなかった生徒が、自信を持って他の生徒に自分の意見を伝える場面が見られ、考えも深めることができました。

昨年度3月に、「みえスタディ・チェック」を再活用し、各学年で習った基本的事項が、身に付いているかどうかを確認したところ、無解答率が減少しました。今後、その単元の学習内容だけでなく他の単元や日常生活との関連にも触れることで、生徒が体験・学習し得た知識を日常生活の中で活用できるようにしていきたいと考えています。

## 家庭・地域との協力による基礎基本の定着を図る取組

### 亀山市立神辺小学校

神辺小学校では、各学年で今まで学んだ学習の確認テストを行い、子どもたちのつまずきの状況を把握しています。そして、つまずきの克服に向けて、地域ボランティアの協力を得て、毎週金曜日に全校体制で補充学習を実施し、学習内容の定着を図っています。また、週末の家庭学習において、つまずきに応じたプリント（4～5枚）を宿題とし、確認テスト→補充学習→週末の家庭学習のサイクルを確立させるなかで、子どもたちに学習内容の定着を全校体制で図っています。

#### 取組① 確認テスト・金曜の補充学習・週末の家庭学習の取組による学習内容の定着

##### ○確認テストを実施し、子どもをつまずきを教員全体で共有

- ・確認テストを実施し、子どもたち一人ひとりが、どの単元のどこでつまずいているかがわかる「算数カルテ」を作成しています。また、単元ごとのつまずきの人数をグラフ化したものを教員に配付し、子どもをつまずきを教員全体で共有しています。

##### ○地域ボランティアの協力による全校での補充学習（毎週金曜日）の実施

- ・1年生から3年生は6限目（短縮日課）、4年生から6年生は7限目（短縮日課）に行います。地域ボランティアは1年生から3年生に支援や丸つけで入り、1年生から3年生の担任は4年生から6年生の支援に入ります。そうすることにより、1年生から3年生の学習が上の学年のどの学習につながっているのかも確認ができ、特に子どもたちがつまずいている内容について、すべての教員が小学校6年間の学習内容のつながりを意識して指導を行うことにつながっています。



地域ボランティア用の  
ファイリング棚

- ・つまずきのある単元について学年をさかのぼってプリント学習を行い、子どもたち一人ひとりの学習内容の理解・定着につなげています。1学期は、個人の弱みを克服することを中心として、それぞれのつまずきに応じたプリント学習に取り組みました。2学期は、「算数カルテ」から弱みが見られる単元の授業をもう一度行い、その単元の補充学習プリントに取り組みさせることで、学習内容の定着を図っています。

##### ○金曜の補充学習と週末の家庭学習の連動

- ・県作成のワークシート（学-Viva!!セット）から子どもたちのつまずきに応じた内容（4～5枚）を選定し、「チャレンジワークシート」として毎週金曜日に配付し、週末の宿題として子どもたちが取り組みます。家庭学習においても、すでに学習した内容を確認なものとし、学習内容の定着を図ります。

#### 取組② 朝の学習での地域ボランティアの支援

朝の学習の時に、地域ボランティアが各クラス2名程度入り、丸つけや、子どもたちへのアドバイスを行います。そのために地域ボランティア用にワークシートや解答をファイリングして渡しています。

#### 取組③ 家庭での学習習慣の確立に向けた学校からの情報発信

##### ○「家庭学習の手引き」の配付（4月）

- ・「学力アップは規則正しい生活から！」というキャッチフレーズのもと、家庭学習の習慣化に向けて取り組むことや、家庭学習を習慣づけるための保護者の役割、各学年におけるつきたい力、自主学習ノートの大切さについて伝えています。あわせて、学年をさかのぼって繰り返し学習することで既習事項が定着し、新たに学ぶ学習内容の理解を助けることにつながることも伝えています。

##### ○「学校だより」での発信

- ・「学校だより」において、週末に取り組む「チャレンジワークシート」の意義や取り組み方についてお知らせし、保護者の理解・協力を得られるよう働きかけています。また、「学校が頑張ること」として、授業改善の取組や子どもをつまずきに応じた補充学習、繰り返し学習、家庭学習の取組を記載するとともに、「保護者・家庭で頑張りたいこと」として、学習時間など、1日の生活を規則的に設定することや、子どもの学習の状況を確認することなどを伝えています。

#### 成 果 学習内容の定着及び学習習慣の確立につながられています

地域と連携し、確認テスト・補充学習・週末の家庭学習の流れを確立するなかで、昨年度からの取組もあり、わかっているつもりになっていたが、確実に理解してないことに子どもたちが自ら気づき、補充学習に意欲的に取り組む姿や、「チャレンジワークシート」に取り組む際に、既習事項を活用することで問題が解けるといふ達成感を実感するなかで、これまではあきらめていたような問題にも取り組む子どもが増える等、学習内容の定着及び学習習慣の確立が図られつつあります。今後も、組織的に学習内容の理解と定着を図るとともに、学校・家庭・地域が一体となり、自ら考え、自ら学ぶ力を育てていきます。



## 子どもたちが自ら本を手に取りたくなる読書活動の取組

御浜町

読書活動の充実に向け、御浜町として各小中学校の図書室の環境を整えるとともに、各小中学校において子どもたちが意欲的に読書に取り組むよう、工夫した取組を進めています。

**取組① 計画的な図書の購入による読書環境の充実**

## ○子どもたちのもとへより早く読書の本を届ける

教育委員会として、年間を通して計画的な図書の購入を進めるとともに、学校の図書室や読書環境の充実に向け、学校司書を配置しています。学校司書の方々の取組により、購入した本がより早く子どもたちの手に届けられ、子どもたちの読書意欲の向上につながっていると考えます。

- ①学校司書を、町内6校（小学校3校、中学校2校、小中併設校1校）に2人配置
- ②各小中学校で、毎年、計画的に図書を購入
  - ・年間を通して、計画的な購入を行うため、学期ごとに図書購入調査（各学校からの購入冊数の報告）を実施
- ③読書の取組状況を把握するため、各小中学校の図書貸し出し冊数を集約（グラフ化）
  - ・毎月、各小中学校から町教委へ図書貸し出し冊数と読書活動の取組状況を報告。取組状況に応じ学校支援を行う

**取組② 教員、子ども、地域ボランティア、学校司書など様々な主体による読書活動**

## ○小学校における取組

- ①1年生では、児童は、読書の時間等に読んだ本を「せんせいにしえて！（よんだほん）」（記録用紙）に記録し、その内容を担任に伝える
  - ・児童が記録用紙をもとに、担任と読んだ本についてコミュニケーションをとることで、読書への意識の高まりにつながっています。
- ②委員会活動で、新刊、課題図書が入った時に、全校集会で実際に本を提示して紹介
- ③地域のボランティアによる読み聞かせ
  - ・地域のボランティア（読み聞かせの会等）の方々により、全校児童を対象に年間を通して、朝の読書や昼休み、読書の時間に読み聞かせが実施され、子どもたちがより多くの本に触れる機会になるとともに、読書に対する興味の向上につながっています。

## ○中学校における取組

- ①養護教諭による絵本の読み聞かせ
  - ・養護教諭による絵本の読み聞かせには、保健室を利用する悩みを抱えた生徒をはじめ、様々な生徒が参加し、多いときには20名ほどになります。この取組は、生徒が心温まる話に触れるとともに、悩みを抱えた生徒などの心に寄り添うよい機会となっています。
  - \*全校生徒対象、毎週火曜日・木曜日（13:10～13:20）に学校内のホールで実施
- ②朝の読書の時間に中学生による小学生への読み聞かせを実施
  - ・異学年2～3人の班を構成し、選定した数冊の本を持って小学生の教室に出向き、読んで欲しい本を聞き取って、読み聞かせを行っています。
  - \*本の選定や読み聞かせをする中学生の割り振りについては、図書委員会で決定
- ③地域のボランティアによる読み聞かせ

## ○学校司書による取組

- ①ブックトーク、読み聞かせ
  - ・ブックトークを行った後、その本の読み聞かせを行うことで、子どもたちの本に対する興味が非常に高くなり、読書の推進につながると考えます。
- ②紙芝居      ③本の紹介      ④図書室利用指導（小学校）      ⑤委員会活動に関わる指導
- ⑥ビブリオバトルの実施（中学校）
  - ・学校司書が計画・準備をして、生徒に目的や実施方法を説明
  - ・生徒は本を選定し、数人のグループでビブリオバトルを実施し、代表が全体の場で発表

**成 果** 図書貸し出し冊数と読書時間が増加しています

御浜町全体として、児童生徒一人あたりの図書貸し出し冊数が年々増加しています。また、平成30年度全国学調の児童生徒質問紙調査において、授業時間以外の読書時間が平日10分以上と回答した児童生徒の割合は、小中学校ともに全国平均を5ポイント以上上回っており、特に小学校においては年々増えてきています。御浜町の調査においても、読書を全くしないという児童生徒はほとんどいない状況です。これらの結果は、町全体として、読書活動の充実を図るための環境整備を行うとともに、各小中学校における工夫した取組、継続した取組が行われている成果であると考えます。